

## 11月2日(日) サムエル記第一6章10～16節

「その日、ベテ・シェメシュの人たちは全焼のささげ物を献げ、いけにえを主に献げた。」

(15節)

---

人々は、7～9節でペリシテの祭司たちが言ったとおりにしました。そして「雌牛は、ベテ・シェメシュへの道、一本の大路をまっすぐに進」みました。まさに、これは9節で「その箱がその国境への道をベテ・シェメシュに上って行くなら、私たちにこの大きなわざわいを起こしたのはあの神です。」とありますが、まさに主なる神はペリシテの祭司たちや占い師たちを用いてご自分がわざわいを起こしたことを明らかにし、ご自身が誰であるかをペリシテ人たちに明らかにされたのです。また主は雌牛を用いて、異邦人にもよく分かるかたちでみこころを示されました。

ベテ・シェメシュの人たちは、神の箱を見て喜びましたが、それだけではなく「全焼のささげ物を献げ、いけにえを主に献げ」ました。つまり、主を礼拝したのです。神の箱が帰ってきたことを礼拝というかたちで表しました。しかし、ここでベテ・シェメシュの人たちが行ったのは正しい礼拝だったと言えるでしょうか。むしろ大いに問題があったと言わざるをえません。レビ記1章3節には、「そのささげ物が牛の全焼のささげ物である場合には、傷のない雄を献げなければならない。」と定められていますし、「会見の天幕の入り口に連れて行き」と言われていて、なぜ大きな石の上に置いて全焼のささげ物を献げたのか理解できません。喜びをもって主を礼拝することは大切なことであり、主を礼拝することを否定するものでは決してありません。しかし、主の定めを逸脱した礼拝を主は決して受け入れられませんし、私たちが自分勝手に行った礼拝を主は受け入れてくださらないでしょう。私たちは、主の御前にどのような礼拝をささげているのでしょうか。どこかで主のみこころを無視した自分勝手な「自家製礼拝」をささげていることはないでしょうか。

## 11月3日(月) サムエル記第一6章17～21節

「主はベテ・シェメシュの人たちを打たれた。主の箱の中を見たからである。主は、民のうち七十人を、すなわち、千人に五人を打たれた。主が民を激しく打たれたので、民は喪に服した。」

(19節)

---

19節には衝撃的なことが記されています。それは、主の箱の中を見たことのゆえに、主はベテ・シェメシュを打たれたということです。彼らが、どのようにして主の箱の中を見たのかは、

よく分かりません。恐らく蓋を開けて中を見たのでしょう。それは自分たちの好奇心からだったと思われまふ。そこには、聖なる主に近づくという恐れがありませんでした。罪人が不用意に、神の臨在の象徴である神の箱に近づいた結果、民の一部が打たれたのです。そのことを通して主は自分が恐れられるべきお方であることと自らの聖さを明らかにされたのです。私たちは主のあわれみと恵みのゆえに、特に主イエス様による罪の贖いを通して、主の御前に恐れなく近づくことが許されています。本来罪人である私たちが近づくことができない主の御前に近づくことができることは何という幸いだらうかと思ひます。しかし、私たちは主の恵みを忘れて、このベテ・シェメシュの人たちのように不用意に主に近づいていることはないでしょうか。私たちは主に近づくことができる感謝と喜びと同時に、主の聖さをおぼえて謙遜に主の御前に出る信仰はあるでしょうか。

20節でベテ・シェメシュの人たちは、「だれが、この聖なる神、主の前に立つことができるだろう」と言ひます。そして、キルヤテ・エアリムへと主の箱を移そうと考えます。しかし、彼らは、不用意に箱を開けて、中を見たという自分たちの罪に気がついておらず、自分たちの罪にあまりにも鈍感です。私たちが決して罪に対して鈍感であってはなりません。示された罪があれば、素直に悔い改め、あるべき主との関係を回復すべきです。

## 11月4日(火) サムエル記第一7章1節

**「キルヤテ・エアリムの人々は来て、主の箱を運び上げ、丘の上のアビナダブの家に運んだ。そして、主の箱を守るために彼の息子エルアザルを聖別した。」**

---

ベテ・シェメシュの人たちから「ペリシテ人が主の箱を返してよこしました。下つて来て、あなたがたのところに運び上げてください」(6章21節)との要請を受けたので、それに応じて、キルヤテ・エアリムの人々は来て、主の箱を運び上げ、丘の上のアビナダブの家に運びました。アビナダブも彼の息子のエルアザルもともにレビ族の家系の者たちだっただらうと思ひられます。ここで主の箱を守るためにと書かれていますが、恐らくベテ・シェメシュの人たちのように主の箱の中を見て打たれて死ぬことがないように守っていたのではないかと考えられます。しかし、恐らく主の箱はアビナダブの家にただ安置されていたにすぎなかったのでしょう。そこから二十年の月日が流れました。(2節)そして、3節のサムエルのことばを見ますと、「心のすべてをもって主に立ち返るなら、あなたがたの間から異国の神々やアシュタロテを取り除きなさい。」と言ひられています。つまり二十年間罪を悔い改めることなく、彼らは主に背き、偶像礼拝をし続けていたのでしょう。しかし、イスラエルのそのような罪深い状態にあつても「イスラ

エルの全家は主を慕い求めていた」とありますように、主はイスラエルに主を慕い求める心を与えてくださったのです。主はご自分の民を決して見捨てることなく導こうとされておられることをあらためて思われます。ですから、私たちの教会でも、一時的に信仰を離れてしまわれた方々があったとしても、その方々に対しても主は何らかのかたちで、主を慕い求める心を与え、主の恵みと深いあわれみのゆえに、再びともに主を礼拝する日が来ることを信じて、それらの方々のためにも祈ってまいりましょう。

## 11月5日(水) サムエル記第一7章2～4節

### 「イスラエル人は、バアルやアシュタロテの神々を取り除き、主にのみ仕えた。」(4節)

---

二十年間、サムエルはどこで何をしていたのかは分かりません。しかし、いよいよここで預言者サムエルが登場する時がまいりました。歴史を支配しておられる主の時が熟したということです。ここで、まずサムエルは「主に立ち返るなら」と悔い改めを求めています。悔い改めとは、主に背いていた状態、主から離れていた状態から主に返ることを意味しています。その中で「心のすべてをもって」とつけ加えられています。つまり主に立ち返るといのは、意思が重要であることを表しているとともに、主に献げていない心や主に不服従な心が一切ない状態で主に立ち返ることが悔い改めであることを教えられます。そして、主に立ち返るために三つのことが言われています。一つは、偶像を取り除くことです。これは、主に立ち返るといのであれば、自分の内側から完全に罪を除き去るべきだということです。二つ目が、主に心を向けということです。これは、心を完全に主の方に向け、そこから他に心を向けないということです。三つ目が、主にのみ仕えるということです。ですから、主に立ち返るといことは、罪を離れて、主の方へ向く方向転換ですが、そこからぶれることなく従い続けることであり、主との関係の回復という面から考えれば、主にのみ仕えるということがなされなければならないということにもなります。そのようにして、主に立ち返り、罪が除かれ、主との関係が回復されたなら、今度は祝福として主がペリシテ人の手から救い出してくださると約束してくださっています。

4節でサムエルの呼びかけに応答したイスラエルの人々は、「バアルやアシュタロテの神々を取り除き、主にのみ仕え」ました。イスラエルの民が主を慕い求めていたことをこのようにして具体的に目に見えるかたちで現しました。私たちは、悔い改めて、主に立ち返る時に、どのような悔い改めをしているのでしょうか。悔い改めたと言いつつ、同じ罪を繰り返したり、主に仕えることを拒んでいることはないのでしょうか。まことの悔い改めをもって信仰生活を送りまし

よう。そして、私たちはともに、目に見えるかたちで悔い改めの実が現れるような歩みをした  
いと願わされます。

### 11月6日(木) サムエル記第一7章5, 6節

**「彼らはミツパに集まり、水を汲んで主の前に注ぎ、その日は断食した。彼らはそこで、「私  
たちは主の前に罪ある者です」と言った。」(6節)**

---

ミツパはエルサレムから北西に12キロほどのところにあった町だと言われています。サム  
エルは、ここに全イスラエルを集めるように言い、「あなたがたのために主に祈ります」と言い  
ましたが、これはイスラエルに対するサムエルのとりなしの祈りです。「彼らは、ミツパに集ま  
り、水を汲んで主の前に注ぎ、その日は断食した。」とあります。水を汲んで主の前に注ぐ行為  
が何を意味しているのかということについては議論がありますが、恐らくは水を汲んでそれを  
ただ主の前に注ぐだけで、水を飲まないことにより、それを断食と結びつけることは可能です。  
つまり、水をも飲まず、ひたすら断食をするということは主の前での自己否定の行為であり、  
主の御前でそのようにすることで、自分たちを生かし、自分たちを守り支えているのは、バア  
ルやアシュタロテのような偶像の神々ではなく、天地万物の創造主である主なる神であるとい  
うことの信仰告白でもあり、主への献身の意味もあります。そのようにして、イスラエルの民  
は自分たちの悔い改めを現しつつ、「私たちは主の前に罪ある者です」と告白して、悔い改めを  
も明らかにしました。

私たちはもちろん神社仏閣に詣でて偶像礼拝をすることはないでしょう。しかし、生活や命が  
支えられていることに対して、私たちは主に心から信頼し、感謝をささげているでしょうか。  
それよりもお金や仕事に頼り、そこに安心感を見出していることはないでしょうか。それは、  
結果的に主に心を向けていないことになりすから、主に心を向けるべきです。もし私たちが  
主なる神以外のものに頼っているなら、すぐに悔い改めて、主に立ち返りましょう。

### 11月7日(金) サムエル記第一7章7, 8節

**「私たちから離れて黙っていないでください。私たちの神、主に叫ぶのをやめないでください。  
主が私たちをペリシテ人の手から救ってくださるようにと。」(8節)**

---

「イスラエルがミツパに集まったことをペリシテ人が聞いたとき、ペリシテ人の領主たちは  
イスラエルに向かって上って来た。イスラエル人はこれを聞いて、ペリシテ人を恐れ」ました。

(7節) 4章7節では、ペリシテ人がイスラエルを恐れていたのに、完全に立場が逆転してしまいました。そのような恐れの中で、イスラエルの民はサムエルに自分たちをペリシテの手から救ってくださるようにとのとりなしの祈りを求めます。私たちも、日々の歩みの中で恐れや不安、思い煩い、焦りを抱くことがあるでしょう。そのような時に私たちはどうしているでしょうか。ぜひ教会に告げ、牧師や兄弟姉妹方にとりなしの祈りの要請をすべきです。そのようにして、私たちが個人的に祈るだけではなく、教会の指導者や兄弟姉妹方に祈ってもらえることは大きな恵みであることをおぼえるべきです。

前回、ペリシテ軍に打たれた時には、神の箱を持って来て戦おうとしました。(4章5節)しかし、ここではサムエルにとりなしの祈りを求めて祈りをもって戦おうとしています。ここに主に立ち返ることを通して変えられたイスラエルの民の姿を見ます。もし私たちが主に立ち返ったなら、私たちも変えられ、新しい歩みをすることができます。また、サムエルに祈りの要請をしているイスラエルの民は決して自分たちで戦おうとはしていません。むしろ、主が自分たちを救ってくださることを期待して、主に戦っていただくとしています。これも主に立ち返った者の姿です。主から離れていますと、必ず自分の力で何とかしなければと考えてしまうからです。私たちは主に立ち返り、主とともに歩み、主のみわざに期待しつつ、主に信頼して歩んでいるでしょうか。

## 11月8日(土) サムエル記第一7章9, 10節

**「サムエルは、乳離れしていない子羊一匹を取り、焼き尽くす全焼のささげ物として主に献げた。サムエルはイスラエルのために主に叫んだ。すると主は彼に答えられた。」(9節)**

---

乳離れしていない子羊一匹を全焼のいけにえとして主に献げたのは、贖いの意味がそこにはあったと思われまふ。サムエルは、イスラエルの民のとりのなしの祈りの要請を受けてあわてて祈るのではなく、まずは主にささげ物をするこゝで主との関係を正してから祈りに入っていきまふ。サムエルが主に叫ぶと、主は彼に答えられました。これは、サムエルの祈りを主が受け入れてくださったことを意味しています。私たちが祈る時に、主が答えてくださるような祈りをささげているでしょうか。

その祈りの答えは10節にありますように、ペリシテ人の上に大きな雷鳴をとどろかせ、彼らをかき乱されたので、彼らはイスラエルに打ち負かされたということです。大きな雷鳴という自然現象を用いて、人々に恐怖心を抱かせ、それによってかき乱すというのは、まさに主のみわざそのものと言えますし、すべてをご支配しておられる主は、さまざまなものを用いてみ

わざをなされます。全く人の手によらず、主はご自分の御力と栄光と主権を示すために、このようなみわざをなされました。私たちが、すべてを主にゆだね、主のみわざを待ち望んで祈る時に、主はみこころにより同じようにみわざをなしてくださり、ご自身の栄光を現してください。問題は、私たちが主のみわざを見ることができるような信仰の歩みをしているかどうかということです。戦いに勝利しようと、自分に都合よく神の箱を持ち出すような信仰では決して勝利できないのです。